

平成 21 年 5 月 7 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520547

研究課題名（和文）

戦時期重慶国民政府・南京傀儡政権・日本・華僑の四極構造の研究

研究課題名（英文）

The 4 Poles Structure of Chongjing national government, the Nangjing puppet government, Japan, and Overseas' Chinese during Anti-Japanese War.

研究代表者

菊池 一隆 (KIKUCHI KAZUTAKA)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：00153049

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国近現代史、抗日戦争、華僑、政治力学、「大東亜共栄圏」

## 1. 研究計画の概要

本研究は、研究が少ない戦時期の華僑に焦点を絞り、地球規模でその動態と構造を解明しようとする野心的な試みである。その際、華僑のみの研究を脱却して、華僑、重慶国民政府、汪精衛の南京傀儡政権、日本との4極構造を設定し、政治力学的に分析を加えた。

(1)日本華僑に樺太華僑を歴史開拓的に研究し、北海道華僑との連繫を探る。

(2)日本内の横浜、神戸、長崎、さらに沖縄各華僑の実態と動向を探究する。従来、神戸とか横浜とか地域的に分断した研究はあったが、本研究では同時に日本規模での動態を明らかにする。

(3)日本植民地の台湾、朝鮮両華僑の実態と動向を明らかにする。その際、万宝山・朝鮮事件での朝鮮民衆の華僑虐殺暴動にもメスを入れる。

(4)南洋華僑の実態分析をおこなう。

(5)日本、台湾、朝鮮、南洋の各華僑教育の実態と特色を明らかにする。

(6)欧米華僑の実態と動向を解明する。

これらを総合的に考察し、戦時期における地球規模での華僑の動態と有機的関連を4極構造から分析を加える。

## 2. 研究の進捗状況

(1)戦時期の樺太華僑については、科研でサハリン公文書館などに行き、収集した史料などでほぼ解明し、北海道華僑との融合・離反の関係も明らかにした。

(2)樺太・北海道を除く日本華僑については完成しており、各地の大学や研究機関で調査・収集した史料を読み直し、また新たな史料で現在、強化作業をおこなっている。特に東京での華僑動向については研究を基本的に終えた。

(3)台湾・朝鮮両華僑についても本研究期間に論文3本を書き上げており、台湾の中央研究院、国史館や韓国のソウル大学や国会図書館での史料調査・収集を経て順調な仕上がりを示している。ただ台湾華僑については、戦争末期の状況に不明な点が残し、補強史料を探している。特に万宝山・朝鮮事件については論文をすでに書いたが、重要問題なのでさらに研究を深化させ、単著として書き上げる計画でいる。

(4)南洋華僑については、シンガポール国立大学で調査・収集した日本軍占領後のマラヤ・「昭南」(シンガポール)の実態や対日

抵抗を解明しており、現在、日本軍政と華僑との関連について考察を深めている。また、南洋でもベトナム、タイ、フィリピンなどとの関連にもアプローチした。

(5)日本、台湾、朝鮮、南洋の各華僑教育の実態に関しては、日本、台湾、朝鮮各華僑教育の研究は終わっており、最後の南洋華僑研究は科研で購入した図書を含めて今まさに史料を読みながら、分析を加え、論文作成中であり、本年度中には完成できることは間違いないと考えている。

(6)遺憾ながら、戦時期の欧米華僑の実態と動向を解明するところまでには至っていない。これは全く新しい研究で先行研究もないため、手こずっている。ただし、史料も蓄積しており、時間がある時、史料解読を進めているので何とか書き上げたいと考えている。

### 3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

「研究の進捗状況」で書いた通り、(1)~(4)の樺太・北海道、それを除く日本、台湾、朝鮮、そして南洋各華僑の戦時期における実態と動向についてはほぼ完成している。また、(5)華僑教育に関しては現在進行形であるが本年度中には当然完成させることができる。問題は(6)であるが、科研期間中に基礎を築き、なるべく早く完成させたいと考えている。このように、(1)~(5)は完了、もしくは順調であることから、8割以上のできで、「おおむね順調」といえるであろう。

### 4. 今後の研究の推進方策

現在、以下のように考えている。

(1)まずは現在、執筆中の「華僑教育」を完成させる。

(2)今年度が科研最終年度なので、4年間の研究成果報告書の作成をおこなう。

(3)研究成果報告書を基盤に、研究は蓄積してきていることから、日本、台湾、朝鮮、南洋各華僑の実態と動向研究をさらに補強、充

実させ、『「大東亜共栄圏」と華僑 - 媚日・面従・抗日の構図』(仮題)として完成させ、出版助成金応募を考える。

(4)華僑との関連で重要テーマである「万宝山・朝鮮事件」は研究をさらに深化させる。そのため、中国吉林省で現地調査、史料収集を実施し、論文を強化する。

(5)欧米華僑に関しては、本年度中、研究を継続し、基盤を創り、近い将来、論文として発表したい。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

菊池一隆「日本国内における在日中国・『満洲国』留学生の対日抵抗について - 戦時期、日本華僑史研究の一環として」、愛知学院大学『人間文化』第23号、1~46頁、2008年、査読無

菊池一隆「抗日戦争時期における朝鮮華僑の動態と構造」、『近きに在りて』第51号、69~80頁、2007年、査読無

菊池一隆「抗日戦争時期における台湾『華僑』の動向と特質」、『愛知学院大学文学部紀要』第36号、1~40頁、2007年、査読無

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

菊池一隆、有志舎『中国抗日軍事史1937-1945』、2009年、全393頁。

菊池一隆、日本経済評論社『中国初期協同組合史論』、2008年、全425頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕